

---



---

 学 会 記 事
 

---



---

## 第53回膠原病研究会

日 時 平成4年6月10日(水)  
午後6時～  
場 所 有壬記念館

## 一 般 演 題

## 1) SLE 患者血清中のリボソーム構成成分に対する抗体の臨床的検討

佐藤健比呂・渡辺 武  
伊藤 聡・佐伯 敬子  
本間 智子・小澤 哲夫  
菊池 正俊・中野 正明  
荒川 正昭 (新潟大学第二内科)  
内海 利男・木南 凌 (同 第一生化学)

【緒言】SLE では、血清中に種々の自己抗体が検出され、核成分に対する抗体の他に、細胞質成分、特に、リボソームに対する抗体が検出されることが知られている。真核細胞のリボソームは、40S 小亜粒子と 60S 大亜粒子から構成される巨大複合体で、約80種類の蛋白質と4種類の RNA が存在するが、自己抗原となるのは、ごく限られた成分である。蛋白質成分では、大亜粒子の PO, P1, P2 の3種類の酸性蛋白質(以下P蛋白質)と L12, ならびに小亜粒子の S10 が、RNA 成分では、5キロボースからなる 28SRNA の一ヶ所の活性部位、塩基1944から2002部位の59塩基領域(28S)が自己抗原であることが判明している。

【対象・方法】活動期 SLE 90例を対象として、ウェスタンブロット法と免疫沈降法を用いて、これらの抗体を測定した。

【結果】抗 P, 抗 S10, 抗 L12, 抗 28S は、それぞれ、38, 28, 2, 15例で陽性であった。なお、他の膠原病30例、健康成人15例では、いずれの抗体も検出されなかった。抗 P, 抗 S10, 抗 28S の有無で、腎障害の頻度に差はなかったが、いずれの抗体も、皮膚症状を認めた例に出現頻度が高かった。また、器質的精神障害と抗 Pに関連はなかったが、経過中にいわゆる機能的な精神障害を示した5例全例に、治療前、精神症状発現時ともに抗 Pが検出され、うち3例は抗 28S も陽性であった。一方、抗 28S および抗 L12 陽性例は、全て抗 Pが陽性であった。

【結語】リボソーム構成成分に対する抗体は、SLE に

特異的かつ高頻度に検出され、皮膚症状と関連した。さらに、抗 P と抗 28S は、精神症状の指標と考えられた。抗 28S 抗体は、非特異的に RNA を認識する抗体とは異なり、抗 P と共存することから、抗 28S と抗 P 陽性 SLE 群の存在が明らかになった。

## 2) 慢性関節リウマチ(RA)に伴った心筋炎の1例

山本 尚・岡田 義信 (新潟県立がんセン)  
斉藤 征史・堀川 紘三 (ター新潟病院内科)

症例は40歳の女性。平成1年より RA として当科外来にて非ステロイド剤を投与されていたが、平成3年4月末より関節痛の悪化、38°以上の発熱を生じ、6月1日当科入院した。ステロイド剤の投与により、速やかな解熱、症状の改善をみたため、7月16日に一時退院した。9月にステロイド中止と同時に再び発熱、関節痛を生じ、10月2日再入院した。炎症反応の陽性化と心電図にて低電位、陳旧性心筋梗塞様所見、重篤な心室性不整脈(VT)、UCGにて拡張型心筋症様所見を認め、心カテを施行した。冠動脈造影は正常であったが、左室のびまん性の壁運動低下、左室心筋生検にて円形細胞浸潤、心筋細胞の一部脱落が認められ、心筋炎と診断した。臨床経過などより、RAによる心筋炎と考えられた。ステロイド剤の再投与により炎症所見は速やかに消退したが、VTは難治性であった。RAによる心筋炎は稀であり、生前診断された例は非常に少ないため、ここに報告する。

## 3) 悪性組織球症類似像を呈した Ki-1 リンパ腫

根本 啓一・本間 慶一  
大西 義久 (新潟大学第二病理)

Ki-1 リンパ腫は腫瘍細胞が Ki-1 抗原(CD30)陽性を示すほか、特異な細胞形態とリンパ節における浸潤様式を特徴とする悪性リンパ腫である。今回、悪性組織球症(MH)に極めて類似した臨床像を呈した Ki-1 リンパ腫の3例を経験したので、その臨床病理像を報告した。

症例は69才、65才、64才といずれも高齢者で、全例に発熱、肝脾腫、血球減少、肝機能異常を認め、経過中、高度の黄疸、DIC、肝機能不全、腎不全を呈し、それぞれ、3, 4, 7ヶ月の経過で死亡した。

解剖の結果、腫瘍細胞浸潤はほぼ全身性にみられ、小結節性病巣を形成、滲出性病変、組織壊死を伴っていた。また、腫瘍細胞は多核巨細胞を混じり多形成を示し、一部